

ア大統領の親書を幕府へ渡した建物と人員配置を描いた『嘉永六年六月九日亜墨利加國ヨリ之書翰請取場所之圖』（嘉永6 [1853]年）も前図同様に当時の緊迫した雰囲気を持っており、大統領親書手交の場



臨場感を味わっていただけたものと思います。

さらに、大統領親書に添えられていた中国語訳を日本語に翻訳した、岡野重慎による写本『嘉永六年癸丑六月三日北亜墨利加船相州浦賀表渡来合衆國王之書翰寫』（書写年不明）の中でフィルモアが示す友好的な姿勢とは逆に、同じく岡野の写本『亜墨利加國王并重宦之者ヨリ送レル書翰』（書写年不明）では、ペリーが現場の司令官そして交渉者として、強硬な態度を主張していた点を認識していただけたのではないのでしょうか。

このように、日本側の資料を通じて当時の日本人が、社会や情報が混乱する中で交渉の進展を冷静に見守り、上記の資料を書き残していた知見の高い人物がいたことを示そうとしました。

ペリー提督来航後の資料

ペリーが任務を果たして帰国した後に、オランダの地理書を大槻崇が翻訳して刊行した『新譯合衆國小誌』（安政2 [1855]年）や、ウィリアム・グリフィスが約30年を経て初めて書いたアメリカ初のペリー伝記 *Matthew Calbraith Perry* (Boston, 1887 [明治20]年、日本語書名『マシュー・カルブレイス・ペリー』) で、日本人のアメリカに対する関心の高さと、南北戦争によってアメリカ国内でのペリーの評価が遅れていたことを知っていただこうとしました。

ペリー提督が事前に調査した日本研究者の資料

ペリーは日本遠征前に、オランダから長崎の出島に派遣されていた人達が帰国後、日本について

書いていた書物を中心にして、極めて周到な日本研究を進めました。これは、前述のピッドルの失敗を教訓にしたものと考えられますが、特に、エンゲルベルト・ケンペルの *De beschryving van Japan* (Amsterdam, 1733 [安永2]年、日本語書名『日本誌』) やフランツ・フォン・シーボルトの *Nippon* (Leyden, 1832 [天保3]-1852 [嘉永5]年、日本語書名『日本』) などは、ペリーが任務遂行後、日本や日本人を知り、交渉を進める上で大変に有益な情報であったことを記録しています。

『ペリー日本遠征記』の挿絵パネル

この展示会では、図書と資料約30冊の他に、前述の *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan* の挿絵に使われている「ペリー提督横浜にて日本皇帝（将軍の意味）委員と会見」をはじめとして、約10枚の挿絵をパネルにして出展いたしました。これらの絵はペリー艦隊に随行した画家によって描かれたものですが、その画家には素早く正確に描く才能が求められていたといわれています。ちなみに、挿絵「書簡手交の図」と前述の日本人が描いた『嘉永六年六月九日亜墨利加國ヨリ之書翰請取場所之圖』には極めて多くの一致点が見られます。このようにアメリカ海軍では、実用的な写真が普及するまで記録用の手段として、こうした挿絵が使われていたようです。

おわりに

このペリーの来航によって「日米和親条約」が結ばれ、その後タウンゼント・ハリス初代米国総領事の来日で「日米通商条約」が締結されます。そして、我が国の歴史は「安政の大獄」や「桜田門外の変」を経て、やがては幕府の崩壊へと繋がっていきます。

今回の展示会では、このような歴史の発端となるペリーの日本遠征と幕府の対応など日米関係の原点を示し、さらには混乱する世相の中での、民衆の素晴らしい姿を打ち出そうとしました。こうした点をご確認いただけていましたら嬉しく存じます。

おく まさよし

（司書・図書館事務長兼管理運営課長）